

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 253 報告

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

2018.5.16

—藤森著『日本の近代建築』の分析—第 19 回

話：三沢浩

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド第 14 回 (スライド X IV)

■ 寺子屋 253 は 4 人の参加で開催されました。

■ 戦前の「近代建築」は、それぞれの建築家の試行錯誤がそのまま「モダニズム」の生成過程を明確に見せてくれているようです。デザイン思潮と構造、そして環境への向かい方の一つひとつが独創的でありつつ、それらを総合すべきとする方法論が強く意識されながら取り組まれていて、清新な感じがします。『日本の近代建築』が戦前で一応の結末を用意しているのも、「モダニズム」の方法論を個々に直線的に描ける時代だからかもしれません。

■ レーモンドの独自性は、戦前からのそうした方法論の追求が、戦後に再来日してからもずっと続いていて、様々な場面で成長しているところにあるように思います。RC 造の折版構造への取り組みなどはそうした方法論の追求を端的に表しています。



リーダーズ・ダイジェスト



聖アンセルム教会

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 253

2018 年 5 月 16 日 (水)

話：三沢浩

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

—藤森著『日本の近代建築(上、下)』の分析—第 19 回

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド 第 14 回 (スライド X III)

A・レーモンドの初期モダニズム

1. 前回のスライド X III への補足

1) 3 月 14 日は 3 人のみ、臨時の水曜 (1 週前) で連絡不徹底？

2) SD (2000.9) の木造モダニズムの特集号用スライド (XII + X III) を加えた

3) 日大の大川以下の「モダニズム研究」の要旨に X III を

2. 今回のスライド X IV は特別スライドにする

1) 藤森の著書は戦前のモダニズムで終わる

2) A・レーモンドの次は弟子筋の前川と丹下の戦前のことで終わった

3) 従って、今回のスライドは戦後の初期になり、藤森の著書の範囲外

4) しかし、A・レーモンドの戦後の構造の方法論だけはふれたかった

3. 藤森の下巻ではレーモンドの戦前のデ・ステイルからペレ、コルで終わる

1) デ・ステイルの「霊南坂の自邸」でライジングサン本社はペレ

2) そして「ピューリズム」によるコルの「夏の家」が出てくる

3) 「川崎邸」はツルピカのモダニズムではないが、コルを越えるモダニズム

4. 戦前のモダニズムは前川、丹下のコンペ争いで下巻が終わる

1) レーモンドのモダニズムは戦後の再来日で始まる

2) ワイドリンガーの構造の刺戟は「リーダーズ・ダイジェスト」をこえた

3) つまり、新しい RC 造の新しい行き方を探し始めた

5. それは RC 造の構造のいくつかの試みの中で行われた

1) 「聖アンセルム教会」「聖パトリック教会」の折版の試み

2) RC 造の変化には新しい方法論の確立が必要

3) 立教「聖ポール教会」の鞍型、「SVD 教会」の半シリンダー・シェル

4) その間に「群馬音楽センター」の大折版スパンを成功させた

6. 関連スライド (次は再び下巻の続きに戻る)

次回 < 寺子屋 254 > ■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読

藤森照信著『日本の近代建築』の研究—第 20 回

話：三沢浩

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド 第 15 回

2018 年 6 月 20 日 (第 3 水曜日定例) PM 7:15~

場所：新宿区水道町 2-8 長島ビル2階 (江戸川橋駅神楽坂駅徒歩5分)

会費：400 円 問合：大崎元 (有)建築工房匠屋 VED03705@nifty.com